

ヨーロッパ中世における女性の地位 —キリスト教について—

Women's Status in Medieval Europe

渡部悦子¹

キーワード：ジェンダー gender, キリスト教 Christianity, ヨーロッパ中世 Medieval Europe

第1章 緒言

前報2007年度紀要¹⁾では、キリスト生誕以前の古代ヨーロッパにおける女性の地位について、主として法の見地から調べた。古代ヨーロッパでは、結婚している夫婦の間で、夫が婚外で他の女性と関係を持っても、あまり処罰されないが、妻が婚外で他の男性と関係を持つと密通になり、厳しい処罰を科す国が多かった。また愛と美の女神アフロディテを戴く売春婦は、どの古代ヨーロッパ社会にもいた。古代ヨーロッパ社会では、セックスは悪いことでも罪になることでもなかった。本論文では、キリスト生誕およびキリスト教会の出現以降のヨーロッパでの女性に対する考え方の変化について、*Renaissance Woman ; A Source Book*²⁾の聖書の記述と、また岡田温司のキリスト教会の建造物などに描かれた図像の考察をもとに考える。

第2章 聖書に見る人の誕生

1611年に出された *Authorized Translation* のバイブル第1章創世記に次のような記述がある。

Genesis

Chapter 1, verses 26~7

26. And God said, let us make man in our image, after our likeness: and let them have dominion over the fish of the sea and over the cattle and over all the earth, and over every creeping thing that creepeth upon the earth. 27. So God created man in his own image, in the image of God created he him; male and female created he them.³⁾

最初に、神は、神の形に似せて人 (man) を造ろうと言い、そして、その人に、地球上の全ての生き物を支配させようと言ったと書かれている。神は、またその人を、男と女 (male and female) に造ったと述べている。ここでの male と female という語は、英語では、生物学的な雄と雌を意味する、男と女という語なのである。

第3章 女の誕生

創世記の第二章：Chapter 2 では、神がいかに女を造ったかを次のように具体的に述べている。

1 Etsuko WATANABE 千里金蘭大学生生活科学部 (受理日：2008年10月1日)

Genesis

Chapter 2, verses 18~24

18. And the Lord God said, it is not good that the man shall be alone; I will make him an helpmeet for him. 19. And out of the ground the Lord God formed every beast of the field and every fowl of the air; and brought them unto Adam to see what he would call them: and whatsoever Adam called every living creature, that was the name thereof. 20. And Adam gave names to all cattle, and to the fowl of the air, and to the very beast of the field; but for Adam there was not found an helpmeet for him. 21. And the Lord God caused a deep sleep to fall upon Adam, and he slept; and he took one of his ribs, and closed up the flesh instead thereof; 22. And the rib, which the Lord God had taken from man, made he a woman, and brought her unto the man.

23. And Adam said, this is now bone of my bones, and flesh of my flesh: she shall be called woman, because she was taken out of man. 24. Therefore shall a man leave his father and his mother, and shall cleave unto his wife: and they shall be one flesh.⁴⁾

「man」という語は、英語では「人」という意味と「男」という意味を兼ねているので、「アダム」と書くほうが内容はより明確になる。神が人間として最初に創造したのは、アダムという人間であり、男である。男(man)だけであるのは良くないので、協力者: helpmeetを造ると神は言われた。男(man)だけであるのがなぜ良くないのかという理由は述べられていない。神は男のあばら骨を取り出し、そのあばら骨から女を造ったという重要な記述がある。つまり、女は男の身体の一部から造られたので、女は男の身体の一部であるということになる。最初の女は、エヴァと呼ばれる。

第4章 図像に見る女の誕生

このアダムの肋骨からエヴァという女性が造られたという内容に対して、その後の教会の解釈では、アダムの脇腹からエヴァが誕生するという解釈に変わっていくことになり、これを描いた絵とか彫り物が西洋の中世において教会の入り口や内部に多く飾られることになった。

なぜ教会にこの図像が多く飾られるようになったかについて、岡田温司が、「もうひとつのルネサンス」⁵⁾で言及している。すなわち、当時の識字率が非常に低いことを挙げ、書き言葉で伝えるより図像で伝えようという意図があったのであろうと推測している。岡田は、次のように述べている。

アダムからエヴァの誕生が、キリストからの教会の誕生を象徴し、キリストと教会の結婚を意味するというタイポロジーの「高い」知は、正直のところ、わたしにとってもかなり難解な理屈である。"エヴァの誕生"に込められた「意味」がいかにこのような理屈のなかにあったとしても、それがそっくりと見る者に伝わり理解されたと考えなければならない理由はどこにもないだろう。おそらく、メッセージの送り手である教会側にとっても、狙いは必ずしも、そのような象徴的な「意味」を一般の人びとに教え諭すということにあったわけではないように思われる。それよりもむしろ、「女は男から生まれた」のだということを、視覚的な「効果」によって文字通り見せることにあったのではないか。

中略

つまり公共性の強い場の装飾では、まず何よりも、女が男から生まれたものであることを、身体の表象を介して、ストレートに伝えようとしていると考えられるのである。⁶⁾

産む性である女が実は男から生まれたというのは、キリスト教以前には存在しなかった考え方である。岡田の前記の書には、教会などで撮られた多くのアダムからエヴァが誕生する図版を載せている。そのうちのいくつかを著

者の許可を得て図1～図4に掲載する。岡田は、エルンスト・ゴンブリッチを引用して、それらのエヴァ誕生の絵や彫り物も、聖職につく者が誰かが、これがアダムでこれがエヴァと指しつつ、その内容を具体的に説明しなければ、当時の一般の人々には図像の意味は理解できなかつただろうと述べている。

第5章 格差の拡大

中世のキリスト教会では、キリスト教を学ぼうとする過程でさらに女性との格差をより明確にしようとしている。聖書の別のより発展した解釈を以下に示す。

パウロによる「コリント人への手紙」の11章3～13には、次の記述がある。

1 Corinthians

Chapter 11, verses 3~13

3. But I would have you know, that the head of every man is Christ; and the head of every woman is the man; and the head of Christ is God. 4. Every man praying or prophesying, having his head covered, dishonoureth his head. 5. But every woman that prayeth or prophesieth with her head uncovered dishonoureth her head: for that is even all one as if she were shaven. 6. For if the woman be not covered, let her also be shorn: but if it be a shame for a woman to be shorn or shaven, let her be covered. 7. For a man indeed ought not to cover his head, forasmuch as he is the image and glory of God but the woman is the glory of the man. 8. For the man is not of the woman; but the woman of the man. 9. Neither was the man created for the woman; but the woman for the man. 10. For this cause ought the woman to have power on her head because of the angels. 11. Nevertheless, neither is the man without the woman, neither the woman without the man, in the Lord. 12. For as the woman is of the man, even so is the man also by the woman; but all things of God. 13. Judge in yourselves: is it comely that a woman pray unto God uncovered?⁷⁾

ここでは、神と男と女の上下関係が明確に述べられている。つまり、神の下に男、そしてその男の下に女という順位がある。全ての男の上に立つのは神であり、全ての女の上に立つのは男である。つまり、女は、直接には、神につながらなくて、男を通してでなければ、神につながらないのである。男は、その姿が神に似せて造られており、それゆえ男は神の姿と栄光を映すものであるという。そして、教会内では、男は頭に物を被ってはいけない。一方、女は、男の栄光を映すものであり、男のために神が造ったものであるから、天使のために、女は頭に被り物をして力 (power) の印をつけなければならないという。女は、何も被り物をしないそのままの状態では、不完全な存在としている。

12の女が男から出たように、男も女から生まれる。というのは、論理的に、無理があるように思える。男も女から生まれる といっているのは、女が産む性であることを認めているのである。生物学的には、人は、男も女も女から生まれる。しかし、キリスト教では最初に男ありきで、その最初の男のために女は造られたので、あくまで女は副次的存在なのである。

以上に示したように、キリスト教では神の下に男、男の下に女という順位を明確化する努力を行ってきたのである。

同じく、聖書のなかの「コリント人への手紙」の14章27～35には、次の記述がある。

Chapter 14, verses 27~35

27. If any man speak in an unknown tongue, let it be by two, or at the most by three, and that by

course; and let one interpret. 28. But if there be no interpreter, let him keep silence in the church; and let him speak to himself, and to God. 29. Let the prophets speak two or three, and let the other judge. 30. If any thing be revealed to another that sitteth by, let the first hold his peace. 31. For ye may all prophesy one by one, that all may learn, and all be comforted. 32. And the spirits of the prophets are subject to the prophets. 33. For God is not the author of confusion, but of peace, as in all the churches of the saints. 34. Let your women keep silence in the churches: for it is not permitted unto them to speak; but they are commanded to be under obedience, as also saith the law. 35. And if they will learn anything, let them ask their husbands at home; for it is a shame for women to speak in the church.⁸⁾

ここでは、教会のなかで、神のこと、キリスト教のことを、共に学び合おうといているが、その解釈の議論のなかに、女は入れないように定めているのである。教会のなかでは、女はただ黙っていなさいと書かれている。女にとって分からないことは、家に帰ってから夫に聞きなさいといている。女はとにかくただ従うことが大事であり、その意味では、女は自分で考えることなどあり得ないとしている。女は男の下に位置しており、男の考えの枠の中でしか存在できないのである。女は、人間として認められていないものと考えられる。

第6章 夫への服従

「聖書」中の「エフェソの信徒への手紙」では、妻が夫に絶対的に服従することが以下のように記されている。

Ephesians

Chapter 5, verses 21~25

21. Submitting yourselves one to another in the fear of God. 22. Wives, submit yourselves unto your own husbands, as unto the Lord. 23. For the husband is the head of the wife, even as Christ is the head of the church: and he is the saviour of the body. 24. Therefore as the church is subject unto Christ, so let wives be to their own husbands in everything. 25. Husbands, love your wives, even as Christ also loved the church, and gave himself to it.⁹⁾

ここでは、妻は神に仕えるように自分の夫に仕えなさいと述べている。さらに、"he is the saviour of the body" の箇所では、夫が妻の肉体の救い主であると述べている。これは、性的な交わりを指していると考えられるが、性的な交わりは男が女を救う行為であるとは、何を意味するのであろうか。男女の性的な交わりは、男からの施しものであるとは、女の側からは、理解しがたいところである。女は性的対象物としてのみ存在しているようにもとれる。

第7章 服装の制限と女性の性

さらに、「テモテへの手紙」のなかでは、女性の服装についてまで細かく規定し、女性が何かを教えたり、人々の上に立ったりなどはもっての外と述べている。

1 Timothy

Chapter 2, verses 9~15

9. In like manner also, that women adorn themselves in modest apparel, with shamefacedness and

sobriety; not with broided hair, or gold, or pearls, or costly array. 10. But (which becometh women professing godliness) with good works. 11. Let the woman learn in silence with all subjection. 12. But I suffer not a woman to teach, nor to usurp authority over the man, but to be in silence. 13. For Adam was first formed, then Eve. 14. And Adam was not deceived, but the woman being deceived was in the transgression. 15. Notwithstanding she shall be saved in childbearing, if they continue in faith and charity and holiness with sobriety.¹⁰⁾

上記の文は、女性の服装について華美を避けさせ、女性にひたすら貞淑と従順を求めている。髪を編んだり、金や真珠や高価な着物を身につけるのではなく、善い行い (good works) で身を飾りなさいと述べている。また、女が人に物を教えたり、男(man) の権力 (authority) を奪う (usurp) ことは許さないと述べている。このように女はただ静かに従うものでなければならぬ理由は、「アダムが最初に造られ、それからエヴァが造られたからです。」と記述している。

さらに男優位のもう一つの根拠としているのは、14. And Adam was not deceived, but the woman being deceived was in the transgression. の箇所、アダムは騙されなかったが、「女は騙されて、罪を犯してしまいました」の箇所である。つまり、エヴァは蛇にそそのかされて、男 (アダム) と交わったというのである。それゆえ、女は男から造られたことと、女が蛇にそそのかされ男と交わったという罪を犯したというこの二重の意味で、女は男の下に置かれるというのである。とにかく悪いのは女であり、その罪は出産によってのみあがなわれるというのである。女は、女であるということだけで罪を背負っている性であるというのである。同様の内容は、次のカルヴァンの説教のなかにも見られる。

John Calvin, *Sermons*

Calvin's exegetical commentary and sermons were widely used in churches. Text from: The Sermons of M. John Calvin upon the Epistle of S. Paul to the Ephesians, transl. Arthur Golding, 1577, fos 277^v-283^v; and Sermons of M. John Calvin upon the Epistle of Saint Paul to the Galatians, transl. Arthur Golding, 1574, fos 170^r-177^r.

Sermon on the Epistle of St Paul to the Ephesians

Whereas he saith, concerning wives, that they owe subjection to their husbands: we have to mark that this subjection is double. For man was already the head of woman even before the sin and fall of Eve and Adam [1 Tim. 2:13]. And St Paul alleging the same reason, to show that it is not meet that the wife should reign in equal degree with her husband, saith that the man came not of the woman, but the woman of the man, and that she is but a piece of his body. For God could have created Eve out of the earth as well as he did Adam, but he would not. Nay rather he matched the man and woman together with such condition that the man, knowing his wife to be as his own substance and flesh, should be induced thereby to love her (as we shall see again hereafter), and that the wife knowing herself to have none other being but of the man, should bear her subjection patiently and with a willing mind. For if the hand being a member of the body should refuse to stand in his own place and would needs set itself upon the crown of the head, what a thing were it! So then if we look back to the creation of man and woman, the husband on his side ought to be induced to love and cherish his wife as himself: and the wife, seeing that she was taken out of the substance of the man, ought to submit herself quietly unto him, as to her head.

But there is also another bond which doubleth still the subjection of the wife: for we know that

she was beguiled [Genesis 3:6; 1 Tim. 3:14]. Women therefore must remember that in being subject to their husbands, they receive the hire of Eve's sin: and they must consider that if marriage had continued sound and uncorrupt, there had been nothing but joy for man and wife. For know that things were blessed of God and there was not anything which should not have turned to gladness and felicity. But now although God's blessings shine forth everywhere both above and beneath, yet are there always tokens of cursing imprinted in them, so as we cannot behold neither heaven nor earth nor any other creature, but we may partly perceive that God is become a stranger unto us because our father Adam fell from that noble and excellent state, whereunto he was created afore. This is to be seen everywhere in all things, and specially in marriage. For women ought to feel the fruit of their sins: and men feel enough of it for their part. For surely if Adam and Eve had continued in the righteousness that God had given them, the whole state of this earthly life had been as a paradise, and marriage had been so beautified that man and woman being matched together should have lived in such accord as we see the angels in heaven do, among whom there is nothing but peace and brotherly love, and even so had it been with us. Therefore, as now when a man hath a curst and shrewd wife, whom he cannot wield by any means, he must consider with himself, *to here the fruits of original sin, and of the corruption that is in myself.* And the wife also on her side must think, *good reason it is that I should receive the payment that cometh of my disobedience towards God, for that I held not myself in his awe.*¹¹⁾

パウロの「エフェソ人への手紙」についてのカルヴァンの説教の内容はおおよそ次のように解釈できる。

パウロが言うように、妻に関しては、妻はその夫に従うべきである。これは、二重の意味でそうであることに注目すべきである。つまり男は、エヴァとアダムが罪を犯して墮ちる前から、すでに女の頭（かしら）であった。そして、パウロが主張しているように、女が男と同じように、支配したり人の上に立つのは、おかしいということを示すのは、男は女から生まれたのではなく、女が男から生まれたこと、さらに、女は男の身体の一部にすぎないことを挙げている。というのは、神は、アダムを土から造ったように、エヴァをも土から造ろうと思えば、そう出来ただろうに、土からエヴァを造らなかつたようである。男は妻が彼自身であり、彼の身体の一部であることを知って、妻を愛するようになっていくという条件のもとで男と女が一緒になるよう、神は男と女を対にしたのである。また、妻は自身がまさに男（の一部）であることを知って、おとなしく快く男に従うべきである。もし、身体の一部である手が、今ある場所を拒み、頭のとっぺんについていたとしたら、何ということになるだろう。そのように、我々は男と女の創造のことを思い起こすならば、男は、妻を自分自身として愛し、いつくしむことになり、また妻は、自分が男の身体から出てきたことを理解し、静かに、夫を頭（かしら）と仰ぎ従うべきなのである。

妻が夫に従うべきということに二重にするもう一つの理由は女は騙されたということである。それゆえに女は、夫に従わねばならないことを覚えておかねばならない。女は、エヴァの罪を引き継ぐのである。女は、もし結婚が健全で壊れないで続くとすれば、男にとっても女にとっても、これ以上喜ばしいことはないと考えねばならない。物事が、神に祝福されていることが分れば、歓びと至福にならないものは何もないのである。神の祝福が前方の全てを上から下まで輝かし照らしていても、人の中には刻印された呪いの印がいつもあり、そのために我々は天国も地上も他の生き物も見ることが出来ないのである。我々の父であるアダムが高貴で優れたところ（そこでアダムは造られたのだが）から墮ちたので、神が我々にとって遠い存在になったことに部分的に気がつくことが出来る。このことは、全てのものについて、いたるところで見られる。結婚において特に見られる。女は、彼女らの罪の果実を感じるはずであるし、男もそれを十分に感じるであろう。確かなことは、もし、アダムとエヴァが神が彼らに与えた正義のままにいたら、この地上の生活のすべては、天国であったであろう。そして、結婚は、このうえなく麗しいものであり、めぐわされた男と女は、天国の天使たちが暮らすように調和のうちに暮らしたのである。彼らのなかには、平和と兄弟愛のみがあるのである。我々も、そのように暮らしていたであろう。それゆえ、いまや、男

は呪われた抜け目のない妻を持っているので、その妻を男はどのような方策を持ってしても掌握できないので、男はこの地上の原罪とわが身の墮落のことを考えねばならない。妻は神を恐れなくて神に従わなかったことに対する報いを受けねばならない十分な理由があることを考えねばならない。

ここでは、男と女の結婚は原罪であり、愛の営みは罪であると決めている。また、その罪を犯すのは、女が悪いのである。もし、神が全能であるならば、なぜ、そのような女を造ったのであろうかという疑問が出てくる。キリスト教においては、男が神の次にくることから、男中心の考え方が全てを支配していた。女のセクシャリティーは、原罪という罪のもとで、全面的に否定されていたのである。性行為は罪深いもので、性的快楽は、認められないのである。それゆえ、女であることは犯罪者であることであり、それゆえ常に男より低い存在とみなされた。しかしながら、中世キリスト教は、多くの女性信者を得ている。その理由は、安部謹也¹²⁾によると、イエスが、結婚は子を産むためのものというより愛を中心としたことにあると述べている。また、James Brundage¹³⁾によると、キリスト教を信奉するローマのコンスタンチヌス帝が、それまで許されていた妻と愛人を持つ多重婚を禁止したこともその一因と考えられる。

第8章 結言

中世ヨーロッパの女性の地位について *Renaissance Woman; A Source Book* (Ed. by Kate Aughterson) について、特に宗教との関係を記述している部分について考察を加えた。中世ヨーロッパでは、当然のことながら、キリスト教の考え方が、女性の地位に大きな影響を与えている。

キリスト教における女の位置は、1. 神がまず男を造りその男から生まれたということ、2. 女は神に従わず蛇にそそのかされて男を誘惑したという2つの理由で、女は生まれたときから男の下に位置する罪深い存在であるとしている。また、女は、家庭では夫に従うべきであり、教会など公の場での発言は、控えるべきである。男は、女が自分の身体の一部であるゆえに、女を愛し、慈しむべきであるとしている。

また岡田の「もうひとつのルネサンス」からは、「女が男から生まれた」という図像が中世ヨーロッパで多く造られ教会という人々の目に触れるところに飾られていたということから、キリスト教では、男がより神に近い存在であることを、視覚からも徹底させようとしたことが判った。

旧約聖書創世記では、神は、男性のあばら骨を取り出して女性を造ったとしている。ところが、キリスト死後、パウロの記述では、このことを明確に書かず、女性は男性から生まれたと記述している。岡田は、中世に造られたキリスト教会建物に設けられた数々の彫刻等を検討し、これら彫刻は、キリスト教の教えを文盲の人達に分り易く説明したものととらえている。これらの図像によれば、女性は男性の脇腹から生まれ出るように描かれている。このことから中世ヨーロッパにおいては、教会は女は男から生まれたという思想を強く教育しようとしたと考えられる。

このことから中世ヨーロッパにおいては旧約聖書に書かれたように女性は男性から生まれたものとし、女性は男性よりも神から一段階遠いもの、男性より劣るものとした考え方が、支配的であったと推定される。これらが、近年に至るまで、多くの分野で女性が一人前の人間として扱われない原因となり、中世ヨーロッパにおいては強い社会的差別、圧迫が加えられていたものと想像出来る。

参考文献

1. 渡部悦子：古代ヨーロッパにおける女性の地位、千里金蘭大学紀要、第38号、2007、15～17.
2. Aughterson, Kate (Ed.), *Renaissance Woman; A Source Book*, Routledge, 1995.
3. Ibid. 11.
4. Ibid. 11.
5. 岡田温司 『もうひとつのルネサンス』人文書院、1994.

6. Ibid. 32.
7. Aughterson, Kate (Ed.), *Renaissance Woman; A Source Book*, Routledge, 1995, 13~14.
8. Ibid. 14.
9. Ibid. 15.
10. Ibid. 15.
11. Ibid. 15~16.
12. 安部謹也『西洋中世の男と女』ちくま書房、ちくま文庫 2007.
13. Brundage, James A, *Law, Sex, and Christian Society in Medieval Europe*, The University of Chicago Press, 1987

図版

1. 岡田温司 『もうひとつのルネサンス』人文書院、1994, 27.
2. Ibid. 27.
3. Ibid. 29.
4. Ibid. 29.

ヨーロッパ中世における女性の地位

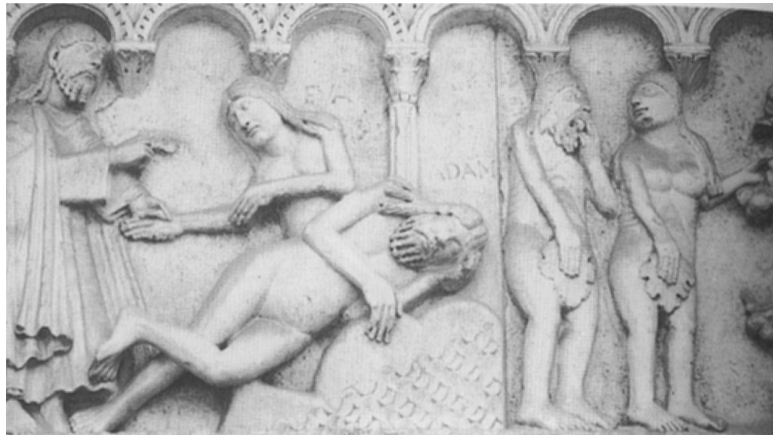


図 1



図 2



図 3



図 4

